

「剣を取る者は皆、剣で滅びる」 マタイ26:47-56

- 1、福音書のイエスの逮捕の場面でマタイにのみ出てくる言葉。当時の格言であろう（橋本滋男）。真性のイエスの言葉ではない。剣の行使を戒めた思潮である。類似の思想には「人の血を流す者は、人によって自分の血を流される」（創、9:6）、「剣で殺されるべき者は、剣で殺される」（黙、13:10）がある。「剣」に関しては、「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする」（ミカ4:3, イザヤ2:4,）の句が、予言者によって、戦後の国の指針として示されている。イエスはこの系譜にある（マタ5:9）。
- 2、この聖書の言葉に体を張った人。阿波根昌鴻（あわごんしょうこう1903-2002）沖縄本島の上本部村に生まれる。県立嘉手名農林学校を休学（神経痛）、別府で温泉療養、高砂町のホリネス教会大沢牧師宅に約1年世話になる。この間入信、受洗17才。後大阪にでて上京、関東大震災に遭う。1925移民募集に応じ、キューバ、のちペルーに。1934年帰国、京都一燈園に西田天香を訪ね、後伊江島に住み、デンマークの国民高等学校に模して農民学校建設を志す。1945年沖縄戦で一人息子を失い戦禍を目の当たりにし、反戦平和のために闘うことを決意、米軍占領下の伊江島土地闘争では常に先頭に立った。「剣を取る者は皆、剣で滅びる」の聖句の碑が闘争小屋の前、及び資料館入り口に記録されている。復帰後も一貫して軍用地契約に応じない反戦地主として闘い、1984年反戦資料館「ヌチドゥタカラの家」を建設・主宰、反戦平和活動をする（現在は財団法人「わびあいの里」が運営、養女謝花悦子常務、「心の反戦地主」の会主宰）。「米軍と農民」（1972）「命こそ宝」（1992 岩波新書）。語録。「人間性においては、生産者であるわれわれ農民の方が軍人より優っている自覚を堅持し、破壊者である軍人を教え導く心構えが大切であること。原爆を落とした国より落とさせて国の罪は大きい。」
- 3、私と阿波根昌鴻さんとの出会い。米軍基地問題への目覚めー岩国。ベトナム戦争時反戦米兵支援に関連して初めて沖縄を訪問。以後沖縄の歴史、本土のよる差別、基地問題 [0.6%の国土に米軍74%の基地、危険、騒音、犯罪、地位協定による憲法の及ばない治外法権、本島は18%が基地、加害者性、本土との関係では「構造的沖縄差別」（新崎盛暉）、「犠牲のシステム 福島・沖縄」（高橋哲哉）など] を学ぶ。1970年代訪沖で伊江島に阿波根昌さんを尋ねる。「沖縄のことを本土の人に伝えて欲しい」と言われた。
- 4、今、改憲案（自民党）は、「九条2項、陸海空軍その他の戦力は保持しない」を「九条2項、国防軍を保持する。」に変えようとしている（「9条くらぶニュース第54号」上倉田、小田急団地で発行、この教会のメンバーも参加）。聖書の「剣」は、今は、日本では「国防軍（自衛隊の軍隊認知）」として見えてきている。今日6月23日は<沖縄戦終結の日>が「慰霊の日」とされた（沖縄県条例）日。「沖縄戦で地獄を見て、生きる希望さえ失ったいた太田（昌秀）は、本土から密航船で運ばれてきた憲法のコピーを無我夢中で書き移した。・・・沖縄県民は憲法を求め・・・権利をひとつひとつ勝ち取ってきた。・・・改憲されたら沖縄の戦後の苦労が消えてしまう」（東京新聞6/20）沖縄への罪責を自覚する意味を含め、改憲阻止は我々（キリスト者）の責任であろう。